

随 想

(株)フジコーさんとの出会い

大平洋製鋼(株) 取締役社長
富山大学 客員教授佐藤 祐一郎
Yuichirou Sato

1993年(平成5年)11月のフジコー技報創刊号を読んで、内容豊富な技術論文、魅力溢れる新製品・新技術の紹介等に接し、いつしか次号の公開を楽しみに心待ちするようになりました。そのフジコー技報「tsukuru」も回を重ねてNo.6号の発刊となります。私は創造性豊かな技報の内容ならびにフジコーさんのもつユニークな技術の蓄積の多さに、改めて驚嘆しております。技報編集に携わる関係者の皆様のなみなみならぬご労苦と、たゆみないご努力に対し、深く敬意を表しますとともに、心より賞賛申し上げます。

私とフジコーさんとの出会いは、顧みますと30数年以前のことになります。1966年(昭和41年)に白鑄鉄の鍛練技術について、わが社と当時の八幡製鉄(株)のライセンス契約が成立して、私は北陸・富山と北九州・八幡の間を頻繁に往復するようになりました。創業者の山本秀祐社長とお会いするようになったのはその頃のことでした。ちなみに、それ以来新日鉄(株)さんとは32年間の長期にわたり、親密な研究活動を現在も続けております。白鑄鉄は硬くて脆いものであるというのが一般常識で、当時は白鑄鉄が熱間プレス、熱間圧延などの塑性加工が可能であると考えた人は、誰れもいませんでした。山本社長は白銑肉盛がご専門で、C.P.C装置の原型である縦式鑄掛け肉盛溶接装置を考案して、ピンチロールやテーブルローラの補修ならびに鑄掛けによる溶着・肉盛技術の開発に取り組んでおられました。そして特に理想的な完全溶着法の完成のため、執念を燃やして研究を進められているところでした。同じ白鑄鉄を扱う者同士のご縁とでも申すのでしょうか、初対

面なのに旧知の仲で先輩・後輩(我輩になります)のような感覚で意気投合したことを、つい昨日のことのように鮮明に覚えております。小倉のとある料理屋で一緒したときのことです。呑むほどに酔うほどに肝胆相照らす話となり、先輩の次から次へ飛び出す奇抜なアイデアや白銑鑄掛け失敗談義の数かずに、つい私も膝を乗りだして興味津津と聞き惚れたことを思い出します。当時、わが社では高炭素系白鑄鉄の鍛造新製品を開発するため、ESR(Electro Slag Remelting)装置の導入を考え試行錯誤を繰り返しておりました。浅学の身も省みずに、たしかVAR(Vacuum Arc Remelting)との違いや、特にESR鑄塊のスキン・スラグ生成の形態や効能について、先輩にご進講申し上げたことがございました。豊富な失敗例をもつことは、技術屋にとって何物にも優る貴重な財産であると思います。その頃は今流のコンピュータによる確かな解析能力などなく、トライ・アンド・エラーが新製品や新技術開発の重要な要素を占めた古きよき時代でした。これは後日談ですが、先日先輩から伺ったお話は大変面白く勉強になりましたが、貴重なノウ・ハウがオープンになり、誰かに真似される心配はありませんかとお尋ねしたところ、「誰かが真似すれば、私は次の手を考えるから一向にかまいません。」とあっけらかんと言われたのには驚くやら、感心するやら。しかし誰にも追従を許さないぞという、自信に満ちた起業家魂とでも言うのか、創業者のもっている気概の片鱗を垣間みる思いでした。

時は廻り、先代山本社長はこの世を去られました。折にふれ在りし日のお姿を思いだして人生の無常を

痛感しております。しかし先代の創業者精神は見事に山本厚生現社長に受け継がれ、フジコーさんはますます発展を遂げておられます。優秀なスタッフの方達や従業員の皆様とベクトルを合せ、受け継いだ貴重な伝統に磨きをかけて、創造開発を一心不乱に指向しているお姿には頭が下がります。当然のこととはいえ、革新的な着想から生まれたC.P.C法は、特性の優れたクラッド材の製造法として、その後見事に開花し、今日では熱延ワークロールを始め、各種のロールやローラとして広く賞用され、国内外の注目を集めるようになりました。過日のことですが、ヨーロッパ諸国の中では5指の内に数えられている、ロールメーカーの社長の話によりますと、ヨーロッパにおけるロール製造技術は、日本に追い付け、追い越せで努力した結果、今では日本のC.P.Cハイスロールと、白鉄の鍛造ロール以外では、引けをとらないレベルに到達しているとのことでした。フジコーさんのオリジナルであるC.P.C技術の優秀性を、改めて実感する思いがいたします。

さて、世紀末という準備期を経て、いよいよ21世紀という新時代が到来します。これまでの日本の産業は「いかに作るか」の製造技術では世界を席卷し、今日では文明世界に影響を及ぼすほどの立派な工業社会を作りあげることができました。しかし「何を作るか」の製品技術では世界の先進科学技術に勉ぶことが、まだまだ沢山あるように思えてなりません。これからは自分で基本原理を考えだし、それを製品化してゆく科学技術を身につけ、国際競争力のある差別化商品を生み出すことが必要な時代になると思います。フジコーさんはこれまでに、幾多の困難を乗り越えて得た高い評価に安住することなく、更なる研鑽を積みあげて、長期的視野に立ち、革新的な新製品・新技術の開発に邁進されますものと期待しております。縁は異なるものと申します。私もフジコーさんとの出会いを大切に生かし、切磋琢磨を忘れずに、わが社の活性化に少しでも努力したいと願っております。

